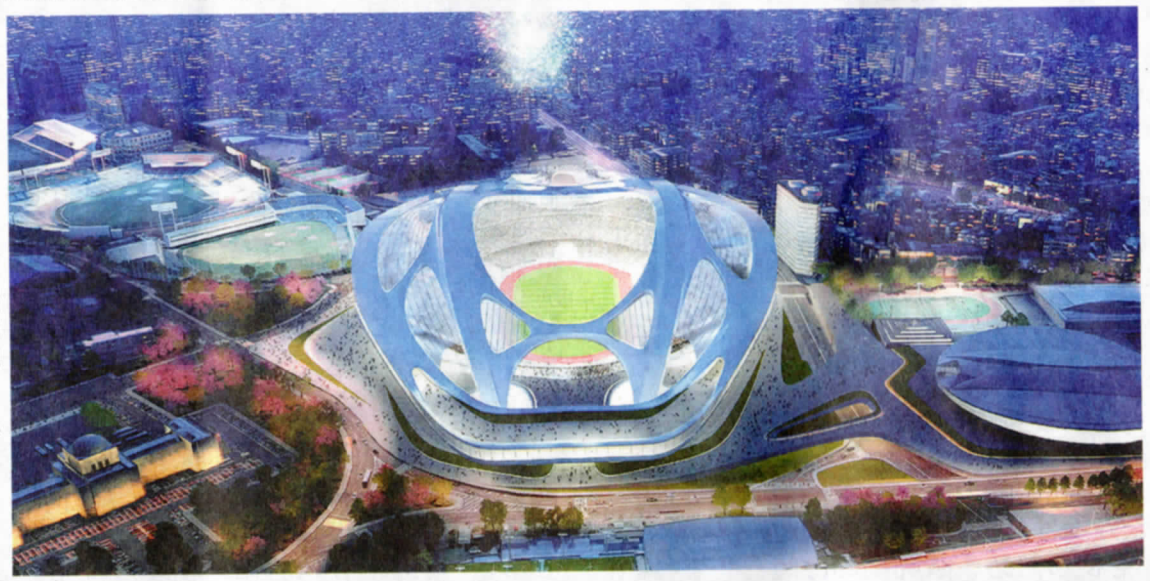
## 新国立契約

二〇二〇年東京五輪・パラリンピックの主会場、新国立競技場の最初の工事契約が九日、建設主体の日本スポーツ振興センター（JSC）と大成建設の間で結ばれた。二千五百二十億円という巨額の工費を要しながら、十分な説明もなく、各界から批判があがる中での見切り発車。国民に大きなツケを残す「負の遺産」にならないのか。普通の生活者には不満と不安がくすぶる。

（鷲野史彦、北爪三記、川上義則、❶面参照）

# 巨額工費 不安置き去り



新国立競技場の完成予想イメージ＝日本スポーツ振興センター提供

## 「企業経営なら破綻」

「通常の企業経営なら破綻している。工費が高騰するなら、まずデザインやスケールを見直さなければ。その資金はいったいどこから出てくるのか」。元会社員吉田敏夫さん(六八)＝江東区＝は憤る。

年金生活で、収入は現役時代の半分以下に減った。外食を控え、移動はできるだけ歩く。巨額な工費に加え維持費が重くのしかかる計画に「生活感覚が感じられない。こんな野放図なことをやっていると、税金を払う気持ちも薄れてしまう」と嘆く。

「このままではモラルハザード（倫理観の欠如）の典型。適正に見直す政治の柔軟性がなければ困る。抜本的に練り上げてほしい」と求めた。

## 「元の建物生かせば」

「新国立競技場のデザインは近未来的で、（神宮の森を擁する）周囲の環境と合わない。ものすごい違和感がある」。早稲田大学法学部四年の黒川慧(さとし)さん(二二)＝埼玉県鴻巣市＝はこう主張する。

黒川さんは高校時代、取り壊された国立競技場で陸上競技の大会に出場した。「多くの選手が活躍した歴史を感じさせる競技場だった。元の建物を生かせなかったのか」と残念がる。

工費はばくだいで実感がわかない。「先行投資と思えなくもないが、あまりに負担が大きいと不安になる」と顔を曇らせていた。

### 昔の公共工事の典型

公共事業に詳しい五十嵐敬喜(ひろよし)法政大名誉教授の話　新国立競技場の建設で問題なのは、不合理な決定がなされても、誰が責任者か分からないことにある。五輪後の収支も考えず、巨額を投じて施設を造る典型的な昔の公共事業だ。基本設計時から工費が約900億円増えたが、数年規模の工事でこれだけ大幅な増額はまれ。しかも、特殊な構造のため巨大アーチの設置には難工事を要するほか、突貫工事による人件費の増加も予想され、最終的な工費はさらにふくらむ可能性が高い。

## 「福島避難者の住宅支援を」

東京電力福島第一原発事故で、福島県いわき市から都内の公営住宅に自主避難する鴨下祐也さん(四)は、工事契約のニュースを聞き、次のように漏らした。

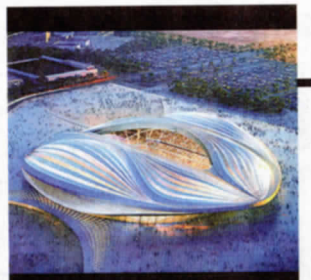
「東京五輪に水を差すつもりはないが、新国立は世界的に見ても破格。一千億円ぐらいに削減できれば、避難者への長期の住宅の無償提供は可能になるのに…」。鴨下さんは、首都圏などに避難する福島県の人らでつくる「ひなん生活をまもる会」の代表。福島県は一七年三月で自主避難者への公営住宅の無償提供を打ち切る方針を決めた。

小学生と中学生の子どもがいる。「放射線量がまだ戻らないのに支援の打ち切りが進む。被災者のことも忘れないで」と話す。

## 景観・コスト… 前衛デザイン 世界で物議

ザハ・ハディド氏

工事契約が始まった新国立競技場。デザインしたのは女性建築家ザハ・ハディド氏だ。世界中で大規模なプロジェクトを手掛ける一方、前衛的なデザインが物議も醸してきた。



サッカー・ワールドカップカタール大会のスタジアムのデザイン＝ハディド氏の建築事務所のホームページから

韓国・ソウル市内に2014年3月オープンした東大門デザインプラザ＝ソウル市提供

中国・北京の銀河SOHO＝2013年8月（白石徹撮影）

イラク出身でロンドンで建築を学び、一九八〇年代以降、頭角を現した。だが、既存の建築の枠に収まりきらないデザインに技術や予算が追いつかず、約十年にわたり、実際に建築物が完成しない時期が続いた。

八三年、香港のレジャー施設の国際コンペでは建築家磯崎新氏の支持で一等に選ばれるが、資金不足で幻に。八七年には東京都内でも麻布十番（港区）や富ケ谷（渋谷区）でビルが計画されたが、バブル崩壊で頓挫した。この時期は「アンビルド（建築されない）の女王」「ペーパーアーキテクト（紙上の建築家）」と異名を取った。

九〇年代に入ると、コンピューターを用いた設計技術の進歩もあり、実績を重ねるようになるが、今度はデザインが議論の的になるケースが出てきた。

最近では、サッカーワールドカップ・カタール大会（二〇二二年）のスタジアムが「女性器のようだ」と批判され、韓国・ソウルで昨年オープンした「東大門デザインプラザ」は「とぐろを巻いたヘビ」とやゆされた。同プラザでは、景観を問題視する韓国メディアに、ハディド氏は「問題は政治家であって私ではない」と反論した。

新国立のデザインを選んだ二二年十一月のコンペでも、巨大で迫力あるデザインが評価される一方、一部の審査員から景観に与える影響やコスト面を心配する意見が出ていた。

審査員の一人の内藤廣東大名誉教授は昨年十月、都内で開かれた日本建築学会のシンポジウムで「（ハディド氏の案は）技術的にも経済的にもハードルが高すぎるように思えた」と明かした。コンペの状況を「時間のない中で『早急に』と言われて審査した。拙速だったといわれても仕方ない」と語った。

ハディド氏のデザインは応募四十六作のうち最終審査の三作に残ったが決着がつかず、最後は審査委員長の安藤忠雄氏が「実現が難しい分、日本の技術力を世界に示すことができる」として選んだ。（森本智之）

## おーい 栗え助 森栗丸